

X-88

148

359

演劇脚本

清正誠忠錄 五幕

鈴音真似操 壹幕

版權所有

088510-000-8

特52-577

清正誠忠錄・鈴音真似操

竹柴 金作／著

M27

DBJ-0167



清正誠忠録

序幕 二條城内の場

一加藤王計頭清正

一澁川妻菊野

一淺野輝正太朝幸長

一同娘 楓

池田三左衛門尉輝政

一腰元 四人

澁川八右衛門利重

一茶道 一人

徳川内大臣家康

特 52
57

本舞臺花の丸の金襖上手へ寄せて九尺の大床の間塗櫃是に義と云ふ文字を書きし大掛物上
 下折廻し出這入りの杉戸正面下の方金襖日覆より同じく金張りの大欄間をゐろし平舞臺一
 面に薄緑りを敷詰め向ふ揚幕出這入りの杉戸何れも二條城内書院の体爰に秘四人誂本行茶
 の湯の道具を掃除仕て居る此模様管弦にて幕明く(○)何と皆さん今日大阪より秀頼様が
 此二條の館へ成らせられ内府様と御對顔遊ばすとの事(△)夫故けふは早朝から御殿の内は
 間毎く此様に掃除に念を入れてと仰付られ(□)殊に御付添の加藤様又片桐池田淺野様の
 お四人をばお饗應に此御書院でお茶の會(×)其役目の御老躰の澁川殿に御息女の楓どのが
 御亭主役御風爐の炭も投入のお花も残らず調へど(○)何と申も急場故御飾付も略せられ形
 斗成る此お道具(△)夫よ付ても御容様は皆戰場でお強ひる方其内取分け加藤様は(□)お名

を呼んでもふこり杯は直に落ると言ふ事故お襖越み私共も(△)お顔を覺へて置たい者どや
 が最う御入來に間も有るまい(○)些とも早くお道具を爰へ直して此事をお奥へ申上ませう
 と此時向ふにて呼びお客ト呼ぶ娯皆(○)最早お入乃お知せなれば(△)澁川殿や楓さま
 へ(□)少しも早か知らせ申ませう(△)そんなら皆さん(○)ドンお奥へ(四人)参りませうト
 侍女四人下手杉戸の内へ這入る又向ふにて(呼)お入りト詭への鳴物に成り向より加藤清正
 池田輝政淺野幸長片桐且元何れも立烏帽子大紋好その拵らへにて是へ新相中の茶道壹人案
 内して出て來り花道に留る此時上手より澁川八右衛門ふけたる臺上下衣裳好その拵らへに
 て出迎ひ双方宜敷有て(八右衛門)是は(諸侯)方にて今日の御供奉御苦勞千方身不肖なれ
 共澁川利重主人内府より御饗應の役命ぜられ老後の面目是に過ぎ(清正)珍しや澁川氏御丁
 寧なる其出迎ひ今日た右大臣家の供奉に列なる我々四人殊に清正昔と異り自然と氣根も薄
 らぎて心せきなる我氣性(輝政)夫に引かへ澁川殿は流石數度の戰場に後れを取らず生残り
 未頼母しき英雄にて(幸長)斯く老躰に及ばれても壯士に優る其容躰今日供奉の幸長も足下
 の武勇にあやうりたし(且元)流石名譽の内府公御家臣多其中にてお撰と有り此役目一同
 祝着(四人)至極に存する(八)何は然れ御列侯に是成る席へ(清)然らば御免(四人)下され
 へト右鳴物にて四人舞臺へ來り上手大床の間の掛物に目を付宜しく住ふ清正思入有て(清)
 ハテ珍らしき此お軸仁義八行五常の文字を認めあるは多けれど(輝)義と言ふ文字を筆太に

物せま黒色世の常成らず(幸)筆の運びも自から勇氣を含む此筆勢(且)殊に今日右大臣家の
 當御城へ渡御ありし其お饗應に文字さへ(清)心ありげな義の一字シテ誰人の(四人)お筆で
 御座るなト八右衛門思入有て(八)されば夫こそ我主君内府様のお筆で御座る(清)夫や内府
 公の(四人)御自筆となト詭の合方に成り(八)誰今改申さずとも凡世上の士農工商各々身分
 に差別は御座れど何れも直なる道を以て其一心を良えと致して武士とる者は義を第一に金
 鐵の重きに譬へ各々方にも既に此度右大臣家の御上洛の御供召され此城内へ御入おれば所
 謂故太閤殿下以來の御厚恩に報ひ玉ふ拔群の義心成りと寡君にも御賞美有てお饗應の此御
 席へ掛置よと命ぜられて御座り升る(清)ハ、扱ハ斯迄内府公には我々が寸忠を御賞美下し
 置るしどの清正始め列座の面々身の面目と申もの(輝)殊更今日内府公と右府公との御對顔
 誠と疎意なきお扱にて(幸)御配膳さへ俱に致されお茶お菓子に至まで(且)半ばを分てお手
 づから御毒味有て秀頼公へ進ぜられてのお饗應關東大阪御和親を表せられたる御對顔(清)
 我々身に取り聊かも疑心を抱く所もなく(輝)實に仁義のお斗らひと(幸)思はば感涙袖をひ
 たし(且)案堵の思ひを(四人)致して御座る(八)何は格別御休息の御徒然を慰む爲不手前な
 がら娘楓が鹿茶一服献じ升れば何卒御笑味下さるべし(清)スリヤ我々へお茶の湯の(且)お
 もてなしで(四人)御座るとお顔見せて思入八左衛門前へ出て(八)列侯方には今日の御茶
 は御意に叶ひませぬか(清)イヤ、心に叶わぬと申義で御座らぬが本田佐渡の御邸宅へ

招れし節元より不骨の我々故(輝)不心得成る茶の湯に出逢ひ是迄數度の戰場にて遅れば取らねど吞方さへ(幸)知らねば殆ど差間へ當惑致して冷汗に肌着を濡らせし其場の轉倒(清)幸ひ其座に細川が折能く茶道に名を得し事故我々其場で幽齋を無理に師範に相頼み(輝)上席に据へ具物の扱ひ皆傳授を受たれど(幸)元より不得手の我々茶の湯の席に連らなつたれば(清)取分福島正則あぞこれ詰とやらの末席に据わり茶碗廻しを致しと不手際(且)幸にして且元は其席に居合せず然し其場の滑稽は後に至りて承り思わす抱腹いたせし位ひ(清)折角の御芳志も鹿相が有ては失禮ゆへ(且)何卒御無用に下されへト思入にていふ(八)實に我國に指折の豪傑方故其節の御迷惑も左ころ思われ嘸御手懲ではムらうが今日は長々しき手順の義は更に止め世俗にいへる手前流義御勝手次第に一腹宛召上ては下さりませぬか(且)斯まで厚き仰せ故御辞退申も何とやら然らば各々仰せに任せ一服所望致ろうか(清)市の正さへ左程まで言るゝからはあのみまゝに辞退致すも却て失禮(輝)餘り聞分なき様にて(幸)思召も如何あれば(清)仰せに任せ一服宛(且)然らば所望致すでムらふ(八)スリヤ召上り下さるとナ(清)如何にも頂戴仕る(八)夫にて拙者もト思入有て下手へ向ひコリヤ娘是へ參つてお茶の用意(楓)ハアト詭らへの合方になり下手杉戸の内方娘楓高髻振袖にて出て本行に茶を立る事よろしく八右衛門は毒味をして(八)コリヤ娘左様な長々しい事では各々が御退屈じや手順の義は御免を蒙り四服一度に御出し申せ(楓)父上の仰せなれど夫では余り

失禮故(八)イヤ〜夫が戰場流じや大事あい早く致せ(楓)左様なれば御免を蒙り(八)サ早く〜ト楓は茶碗四ツ出して手早く茶を立る事よろしく茶碗を並べる八右衛門は下手に向ひ(八)夫に扣へし女中方にハお茶の給仕をいたされヨ(こし元)ハアト杉戸の内より以前の侍女四人出て件の茶碗を四人の前へ並べる事楓前へ出て(楓)不東な手前ながら召上られ下さり升う(清)イヤ流右は澁川氏銘々盛のお茶の湯とは近頃以て感服いとしと(輝)御體の通りの我々なれば風韻などは更にムらぬ生れ故(幸)矢張ケ様に遠慮なく氣の置けぬか何より馳走(且)其機を悟られ御息女が氣轉に略せしこの手前(清)然らば早速頂戴致さうト四人は茶をのむ八右衛門思入有て(八)イヤ肝心のお菓子とバ殆ど失念致して置たコリヤ〜お菓子と是へ(楓)ハアト立ふする此時上手にて(菊)參るに及ぬ其は菓子只今夫へト奥方菊の片いつし襷なり高つさへ饅頭を五ツのせ下手より出て來る宜しく住ふ(八)うちや菊の夫なる菓子如何いたした(菊)今日豊國神靈へは供へ申せし湯菓子故御忠節あるあな方へ差上度存じまして持參致してムり升(八)コリヤ奥方出來し居は然ば其まゝ何れもへ(菊)ハット上手へ持行四人の前へ直し元の所へ來て平伏する(八)只今何れもは聞の通り豊國の神前へ捧げし是なる湯菓子故何卒御風味下されい(清)神前へ捧げられは供物の菓子と仰せぬる故頂戴なさんと存ずれ共生得手まへは宗旨違ひ(輝)手前迎も御配慮を無息と致すは残念ながら矢張上戸でムる故(幸)湯茶は頂戴仕れどは菓子御用捨下されい(且)然し夫では失

禮故銘々御取分け一ツ宛土産にしては如何てムる(清)何様是と市の正にて能所へ心付かれ
 と(輝)然らば土産に仕らんと四人懐紙を出し件の饅頭を一ツ宛取分ける八右衛門は思入有
 て(八)扱は各々には御疑念有て御風味を下されぬか(清)何是しきあか疑ひ申そう斯御息女
 の手前にて(輝)お茶を頂戴致した上は菓菓子も賞翫致したけれど我々生憎上戸故余義なく
 何れも配分なし(且)銘々土産に致したければ此義と御配慮下されナ(菊)お菓子が御意に叶
 わねば(楓)酒肴の用意申付ん(清)アイヤ其義は忝けなけれど(輝)大事のお伴の今日なれば
 (幸)右大臣家の御歸城までは(且)酒と一同(四人)禁じてムる(八)誠や暫く太平の御代とは
 いへど人心も自と動く世の形勢既に先頃石田の野心關ヶ原の合戦後は分けて關東大阪は互
 ひに心を探り合ふ御疑念晴しに老人が此鬼役を仕らふ(楓)其毒味ハ私しに仰せ付られ下さ
 り升せ(菊)イエ、御菓子を持参せし妾が代つてお毒味を(八)イ、ヤ是あるお菓子こそ忝
 くも神前へ供へし品故女の身で頂戴いたすは恐れあり(菊楓)そこを何卒(八)エ、入らざる
 女の差出口兩人とも扣へ居らふ(二人)ハアト餘義なく扣へる八右衛門は残りの饅頭々懐紙
 へどり押頂き思入有て(八)ハテ結構なるこのお供物有難く頂戴いたしたコリヤ奥各々方が
 お土産とあればあれなるお菓子を一ツに致し折敷へ入てお供方へ(清)アイヤ夫には及び申
 さぬ(八)何及ばぬとお止めあるは(清)お心込し貴殿の芳志無に致すも本意は非ず清正頂戴
 仕らん(且)スリヤ其許には(三人)此場にて(清)只何事も澁川が忠義にめで(八)ヤ(清)サ

忠臣無二の澁川氏頂戴せぬも何とやら各々方は兎も角此清正は戴頂致す(輝)左様貴殿が言
 わるゝをいかで異議に及ばふや(幸)仮令上戸の我々でもお供物あれば此場にて(清)如何に
 も頂戴仕らふ(八)スリヤ御風味を下さるとナ(清)然らば御兩所(輝幸)イザ御一所に(菊)夫
 女中方お茶を早うトこし元の茶を四人の前へ出す事清正頼政幸長は饅頭を喰ふ事且元はッ
 ヲと思入(八)斯く御疑念をお晴し下され御供物頂戴なされしに片桐殿御一人召上らぬと何
 共以て(且)アイヤ其義は澁川氏決して御配慮致さるゝな殊に豊國神靈へお供へありしこの
 供物此場で頂戴致したけれど夫も余りに恐れあればこのまゝ家敷へ持参致し老母に初穂を
 進めし上俱に賞翫致すでムらう(菊)スリヤ片桐様は御老母様へ(楓)アノ御土産に遊升る
 か(且)拙者一人頂戴せぬは世俗にいへる仲間外れ不服の様にムれども八十余才の母の手前
 へ此品を土産にいたさば老の癖物喜びを見まするが聊か手前の孝道振御推察下されへ(八)
 然らば夫もお心任せ(且)君を補佐なす手前ゆへ減多めつたおものはイヤサ容易ならざる御
 供物故母に披露を致せし上半バを分て頂戴なさんト懐紙へ包み袂入れ(清)ハテ結構な
 るこの風味(幸)御供物頂戴致してムる(且)知勇を兼し各々方此場で賞翫めされしはハテ是
 非もあき(三人)ヤ(且)是非某は歸宅の上老母に頂戴いたさせんと向ふ茶道一人出て來り
 茶最早時刻も移り升れば右大臣様には御還御の御觸れ出でムり升(清)君の還御とあるか
 らは最早我々御暇致さん(輝)諸事滞りなく相濟上は供奉に連らなる臣等が喜び(幸)君にも

嚙や御満足殊ニ今日お茶のもてなし(且)澁川氏が心遣ひ我々四人祝致す(八)今暫くと申
 たけれど(菊)右大臣家の御供ゆへ(楓)御名残惜くもこのまゝに(清)内府公と右府公の御對
 顔の義如何ぞと心中密かゝ穩かならき方一關東大坂と子才を動かす事もやと存せし事も
 点の曇らぬ空の時渡り(且)殊に某秀頼公補佐の役故人知れず心勞致せし甲斐あつて無事に
 相濟も豊臣の御家も頓て花見時(輝)散る散らさぬも東西の(幸)風を厭はば兩家の安堵(清)
 只何事も内府公の(且)義といふ文字をと思入有て(清)左様ムらむ澁川氏(八)然らば夫まで
 御見送りをト立うとしてひよろ／＼とするを菊野思入有て(菊)ソレ女中方御見送りをト詠
 らへの唄になり清正輝政幸長且元侍女茶道附て向ふへは入る八右衛門は毒の廻りし思入に
 てどうとなる菊野楓は左右より継り付き(楓)父上さま御氣分如何にムリ升(八)鳩毒故に身
 体も俄に苦痛を覺へし様じやかの一藥は數日に移し自然と廻る毒藥ゆへアノ面々は豪傑ゆ
 へ容易に廻りのあらざれども老体故か八右衛門最早毒氣の利目も見へ五臓もらざる／＼この
 臆亂(楓)夫ヤモウ毒がハア——ト泣伏す(八)エ、めろ／＼と何吠面元より一命我君へ捧げ
 しからは何惜まん早七十の坂を越し物の用にも立ざる身が天下の爲に相果る此上もなき
 老後の面目(菊)サア夫も君より仰せ付かり御果遊す事なれば忠義の美名も残り升すれど
 (楓)影の忠義に御最期を遂げ遊ばす父上様殊に只今片桐様がどうやら毒のある事を(菊)御
 悟りなされし御様子にて御菓子をお持なされしからは(楓)モシ此事が露顯とならば加藤様

を始めとして池田淺野の御兩家あて(菊)あなたを御恨みなされ升ふ(楓)夫を思へば毒藥の
 入し御菓子をお承知で(菊)御上り遊すあなたより傍でみて居る妻や子の(楓)胸は張さくう
 き思ひ(菊)是が泣ずに居られ升ふか(八)ヤア君の爲に一命を捨るは和漢にためし多したど
 へ三家に恨まれても天下の安危にかゝはる大事女は口のさがさきもの故其方達より大事が
 洩れなば盡す忠義も水の泡必ず二人の悴へなりとも洩らすこと相成らぬぞ(菊)たとへ忠
 義の御最期でも戰場あれば兎も角も(楓)今は暫く太平の老を樂しむ父上の(菊)おまめな
 命縮るのを傍で見て居る苦しさは(楓)死るにまさるうき思ひ是が泣ずに居れ升ふか(八)
 夫も乱れし世に生ひ立生き長らへし老毫の七十有余の某と今ま日本に英名轟く加藤池田淺
 野の三士を共に冥府へ伴ひ行と思へば死後の大功名此利重は喜ばしいわ(菊)いくらお
 喜びをされ升ても母と娘が父上の(楓)この御苦痛を目の前にさふ悦んで居られ升ふ(八)何
 に泣事か有べきぞ今わの際に利重と目出度笑ふて門途を祝さんム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、サ、娘も
 妻も笑へ／＼ト八右衛門よろしく苦痛のこなしにて笑ふ(二人)夫じやといふて(八)エ、未
 練ものめが(二人)ハア——ト泣伏すこの時後一面の襖を引扱爰に徳川家康立身左右に近習
 四人付添居て警蹕の聲の掛る菊の楓は此体を見て(菊)君の出御に御座り升(八)ナニ我君の
 お入とナト三人下手にて平伏なし八右衛門思入有て(八)兼てお願り上し饗應の役目首尾よ
 く相濟升てムリ升(家康)この程方の其方が強て願ひし饗應の使如何なる所在と思ひ居つた

が滞りなく相濟で過分に思ふ(八)御懇の御意恐入奉り升○折悪敷持病の惱み失禮の段御用捨下し置れ升(家)汝が心勞察し入るが加藤を初め一天下に英名轟く三人を一時に落命致さずするも是時なき事とは言ながら余も残念に思ふ(九)近習○實に我君と太平の智仁を旨となし爲(一〇)勇はあまも時節を待ち(一一)乱を好まぬ御名將(一二)攻ずるに敵を降伏させ(一三)至然と歸する(一四)一天下トこの内八右衛門うつとりとなる(家)コリヤ利重子供等が事ト立寄るを木の頭ら案じるなトこの模様八右衛門ハ落入菊の楓は歎くよろしく相方にて幕

貳幕目 阿彌陀ヶ峯の場

一加藤主計頭清正

一淺野彈正大彌幸長

一池田三左衛門輝政

一祭の世話人

一同若イもの

大勢

一祇園町の藝子

大勢

本舞臺後ろ祇園町の廓祭りの軒挑灯を釣るし幟を建し書割の遠見三階中二階窓出の瓢箪摸様の揃ひ着流しにて立並び花笠の付れる祭の方燈を持って居る祭の世話人柏子木を首へかけ其外揃ひの手拭扇あぞよろしく此もよふ祇園ばやしにて幕明く

(世話人)どふじや皆揃ふたら日ぐくれさら阿彌陀ヶ峯の豊國様の御廟へ一はながけ繰込ぶ(一)チ、夫ガエ、く今度の祭でどこか一番よふ出来たといふてこの祇園町につく町はありはせんぜ(二)夫アそのはづだ日本中の藝人が揃ふて居る祇園町じや引をとつてど

ないにあらふぞ(三)夫に今度關東から來た杵屋六三郎といふ師匠が節付をしと流行唄じや(四)又鳴物は寶山左衛門唄は松永和楓さんなら皆當時のえり扱じや(五)踊の振り花柳と藤間の師匠が受持じやうまふ揃へてやらうじや(六)わたい等の方は揃ふて居れど殿方の方が揃わんによつて(七)ほんにいつでも拍子であんぜういかんで困るわいなア(八)成う事なら今一度爰でけいこをした上で(九)うまふ揃へて阿彌陀ヶ峯へ繰込やうおしたいものじや(一〇)モシ世話人の親父さん皆々いふて見ておくれやす(世)ヲ、尤じやサアくま一度稽古じやくト柏子木を打つ皆々並よく居て手を打を下座のうたになり「梅はかれても尾花の茂るヨイヤサいつも都は花益りヨイヤサ」(皆々)サアく是で揃ふたく(世)どろういふ間にとつぶり暮れた今の工合でねり込めくト踊りながら上手へは入る知らせに付き後の道具幕切て落す

本舞臺四間常足の貳重八枚かざり山乃蹴込後ろ黒幕上下共杉林真中五輪の塔石の玉垣門のある扉石の燈籠日覆より杉の釣枝阿彌陀ヶ峯豊岡御廟の体山嵐にて道具納るト唄淨琉瑠になり「夏近き卯の花下し空晴て雲間に星の二ツ三ツ時さへ五ツ生茂る木の間を洩れて亥中月」ト本釣鐘になり花道より淺野幸長東の揚幕より池田輝政同じ持へにて出で双方花道よ止り(池田)誠や真如實相の影清く晴れ渉る山路も秋の習ひにて見る間にくらき阿彌陀ヶ峯(淺野)常なき風の吹き下し雲隠れなし給ふとも四海を照し給ひたる殿下の

光りいまだ失せず(池)今宵御廟の祭典とて都の町の下民等へ登山を免す神の庭(淺)群立鳥の夫ならで麓に低く聞く雁の啼音に雨を~~知る~~秋や(池)連をいとし廟參も赤き心を忍ぶ山(淺)梢をさそう夜嵐に遠近告ぐる鐘の聲(池)あれも無常の(兩人)響じやナア「晴れぬ思ひにはか取らぬ道の蛤唄へ立昇る霧が有らぬか探る手に」ト此内双方舞臺へ來り二重へ上り(池)ヤ夫へ來たるは何ものなるそ(淺)左いふの池田輝政の(池)その聲音こそ幸長との(淺)言合わさぬと御邊と某し(池)同じ底意を押し(淺)歸國をさんと立別れ(池)神に誓いをかけまくも(淺)賢こき君の御廟へ詣で(池)引取所存で(兩人)是はしとり「解て落たる春の山水ト唄の上げ(池)扱早速に承り度ハ幸長殿には御腹中何ともムらぬ(淺)其お尋に付ても御邊にも承らんと存せしは今日澁川が取持にて馳走に事よせ我々へ進めし供御蒸物こそ鳩毒仕込ありしと推察せしが如何なるや(池)我も左様と察せしゆへ食すまいとは存せしが毒味致せし澁川の忠節を空しく致すも不本意なりと存せし故毒合点で食し申した(淺)殊更以て清正殿上座にあつて食されしをわれく如何で猶豫なさん死すべき時に死せざれば武夫の身の不本意と毒と知つて覺悟なし食してムるも豊國へ捧げし供物で毒死なすは是ぞ殿下へ捧ぐる一命申さば殉死も同然なり(池)夫故伏見の舟場まで右大臣家にお暇爲わり密に是へ引かへし阿彌陀ヶ峯の露霜と消ぬる覺悟の池田輝政御邊も同意で有りしよな(淺)いかよも幸長同意でムる御邊が左様御所存なら冥府へ趣よき道連れ(池)誠に是ぞ信友の心

は同じ御邊と某し(淺)生ると時と異なれど死は俱にする忠義の功し(池)イデ其義なら廟前にて(淺)泉下にムる神靈へ(池)拜禮致して(兩人)最期をどげんと兩人廟前へ向ひ(池)豊國明神へ申上ん池田輝政今日右大臣家の供奉なして二條の館へ參上せしに神靈へ捧げし供御とて徳川内府家臣たる澁川八右衛門がもてなし振毒とは知れど余義なき場合覺悟いたして食せしも數度の戰場生残りかく濁りたる世に長く余命を保つ心なく清き泉下へ趣きて君へ仕ふる我赤心(淺)言合はさねど輝政と同意と覺悟致せしも殿下御他界の其後は淀殿の御身持めしくやゝともすれば關東を恨みぬひて大坂より事を發する思召夫を遮り諫めまつれば舊恩を打忘れ今徳川の威勢になびきへつらふなそこの御述懐誠忠勇士の身に取ては只歎かわしく存るのみ(池)よしや當今徳川殿の新恩厚く蒙るとも君の舊恩重くして忘却致す愚臣等ならず(淺)依て覺悟を仕り御祭日こそ願ふ所君の御廟の御庭を汚し是にて殉死仕り度(池)清き御廟所心なく(淺)血汐にけがす其罪は(池)御赦免願ひ(兩人)奉る(池)イヤ幸長もろ共に(淺)いふにや及ぶかくの通りト兩人差添をぬき掛るこの時後ろの五輪の塔の影より前幕の清正出て(清正)アイヤ其切腹は叶ひ申さぬ(池)ヤ、左いふは加藤清正殿(清)兩侯の赤心神靈も聞しめされ嘸御満悦でムらふが今は切腹叶ひ申さぬ(池)そは何故でムるよナ(清)御廟前にて御殉死あらば徳川殿の謀略にて我々三士毒に當り變死を遂げしものならんと十に八九は大野等が淀殿へ讒をかまへ軍馬を動かす時に至らん是ぞ天下の騒乱にて多年

の問亡君が御心勞を遊されし豊臣の天下滅亡あり只亡君の御世繼を御大切を思召さば苦痛を忽び御本國へ其まゝに引取られ御病氣体にて御最期が然べしと存ぞ申す(池)スリヤ清正殿には日頃より猛き心に似もやらず(淺)毒氣の惱みに精心乱れ徳川殿を恐るゝよナ(清)イヤ清正毒腹なすともいかで勇氣の碎けんや徳川殿の謀略あらばわれに属する手勢を以て只一戦にかけ惱まし清正その場で討死なすとも徳川殿の首を揚んぬ掌にムれども刃向ふ所存は止まり申した(池)シテ又夫は(淺)何故に(清)されば清正今日の供奉につらなる前以てもし徳川殿我威に募り右大臣家へ御無禮あらば飛掛つてさし違んと覺への短劍懐中みし様子如何と伺ひしに我胸中を徳川殿さども見板希代の老将秀頼公を厚く敬ひ既お今日右大臣家へ配膳の饗應すら徳川殿の配慮にて毒味せらるゝ赤心に心の弓の弦も切れ只感涙を流してムる斯く迄仁義を専らにせらるゝ君を計んなそとは空恐ろしき事共なり假令このまゝ、毒死なすとも恨存せぬ此清正我日の本も太平にて萬民鼓腹を要になせば智仁は衆に勝れたる片桐を相頼み右大臣家の補佐となし徳川殿のさし圖に任せ年月を送る時と早老年の徳川殿今十年とと保たぬ齡ひ冥府の鬼となられし後は大坂城にて事を發し豊臣二代の政事を行ふ時節の來ると必定短慮は功をなさぬの本文(池)テハムらうが此まゝに我々毒死なすともハ(淺)向後におめく手術に陥り相果たりと世の嘲り(池)夫故清く(淺)この場に於て(清)イヤ夫にては先君の御遺言にも悖るの不忠(兩人)何と(清)秀頼公十五才とならせぬ夫ま

では天下の補佐に徳川殿へ頼むと仰せの御一言其年限も待ゑずして此方より事を好み切腹召されて一天下の乱れの小口を開かんとは徳川殿の笑坪に入り世の物笑ひひまの當りまして御身は徳川殿の孫聲にして家光公とと相聲の間柄時節を待て關東の天下を元の大坂へ取戻すのが是第一無事を計るが肝要なるぞ(池)スリヤどう有ても清正どのには(淺)無事を謀るをお望みどナ(清)命を輕んじ敵を謀る澁川如き忠臣多く手なづけある中の中々及ぶ所にあらず(池)然らば御邊の意見に隨ひ(淺)我々國へ引取申さん(清)スリヤお聞濟下されしか是れで清正安堵致したトこの時向ふにて太鼓を打下ろす(池)ヤ、俄かに打立アノ太鼓は(淺)非常を告る相圖なるか(清)ハテ心得ぬ(三人)事ではあるトこの時又かすめて渡り柏子になる故三人氣をかへて(池)あれぞ今宵の祭典に登山を免す阿彌陀ヶ峯(淺)都の町の下民等が神をいさむる太鼓の音(清)練込様子と覺へたり(池)然らば我々三人も(淺)彼等に不審をうけぬ内(清)イヤ下山をト立上るをせりの切ツかけ(清)仕らふかトこの道具知らせに付一面にせり上る

本舞臺後ろ一面の黒幕左右山組の張物都て阿彌陀ヶ峯麓の休右鳴物にて道具納る

ト向ふ方幕明の踊の人數下座の唄にて踊りあがら舞臺へ來る此時上手より以前の三人出て皆々と入かわり大勢は上手へは入る跡是を見送つて(清)御兩侯あの唄お聞なされたか(淺)今路中にて童がうたふ小唄の唱歌をとり(淺)梅が枯るれば尾花が茂るいつも都に花が咲

(清)梅ハ則難波の天下枯て尾花の武藏野の頓ぞ茂る前表なる(池)いつも都に花咲くと京洛中の童(淺)うたふといふは天に口をし(清)ハテ歎息のト三人顔見合せるを木の頭ト(清)至りでムるナト右踊の鳴物にて幕

三幕目 大坂城内之場 加藤屋敷の場

- | | | | |
|-----------|---------|----------|-----------|
| 一 幼君秀頼公 | 一 大野道犬 | 一 片桐市正且元 | 一 平野遠江守長康 |
| 一 伊東丹後 | 一 青木民部 | 一 早水甲斐 | 一 野々村伊豫 |
| 一 加藤主計頭清正 | 一 同家臣傳藏 | 一 淀殿 | 一 正榮の局 |
| 一 二位の局 | 一 侍女 | 一 大勢 | 一 竹本連中 |

本舞臺一面の平舞臺正面上下共桐の紋散の襖都て大坂城内奥殿の体管弦にて幕明く(近臣○)何れも昨夜俄に御老職たる大野殿より我々へ密談ありと仰せ有て(△)火急の達しに取敢へず今朝未明に打揃出仕なしたる我々四人(□)いかなる義かは存せぬが御密談とあるからは容易ならざる事でムらふ(×)兎に角是より御老職の詰所へ參つて我々が面會の義を願ひ申さんとこの時上手にて(道犬)お出に及ばぬ只今夫へ(○)アノ聲は道犬どのと上手より大野道犬出て來り(道)各々方には早速の御出御苦勞至極にムる(○)シテ我々へ御密談とは(道)されば今朝各々方を斯くいじめしお招き申し評議いたすは外ならず此程主君秀頼公二條の城へお入の折徳川の老臣たる澁川が進めにて豊國神靈へ供へたる供物と号

して饅頭を供奉の諸侯に出せしを其座で食せし池田淺野歸洛致せし其日の中病氣といつて本國へ引取間もなく病死の届け正しく食せし饅頭に鳩毒ありと覺へたりコリヤ此まこには打捨難く夫故密かに評議なさんと火急にお招き申してムる(○)御老職の仰せの如く既に其日は右大臣家始めての御上洛なれば警固の諸侯も自ら進み(△)勇士乃面々御供なせば大坂方の勢ひに流石の徳川内府殿も恐怖なせしと相見ゆる(□)夫故にこそ城内にて我君初め警固のものにも手厚き饗應いたせし由(×)然るに内府の反間にて池田淺野の兩侯を鳩毒殺とは以ての外なり(道)右の虚實を探らんには其場で供物の毒味せし古老の臣たる澁川が時日違へず病死せしと聞込たるが一ツの手掛り只此上と手を廻し内府を討取る手筈が肝要各々御所存如何でムる(○)仰せ迄も候わず仁義を飭る野心の内府(△)大坂方の勇士等を毒殺なすは是全く(□)秀頼公を失ひて天下を握らん下心(×)かく御見込の付し上は此方よりして討て出で(○)家康殿の首しを賜わり(△)舊恩蒙むる我々が(□)秀頼公へ忠義の手始め(×)軍さの用意を致すでムらふ(道)ハテ勇ましき各々方かゝる御所存聞上は時日過さず出陣の尙も軍議を示し申さんとこの時襖の中にて(長康)其軍議御無用なりト襖の中平野長康出る(道)何人ならんと思ひしに貴殿は平野遠洲どの(○)シテ其仔細は如何でムる(長)別に仔細はムらぬと正しく毒死をいたせしか又は全くの病死なるか篤と實否も糺さずして迂濶に事を仕出しなば忠義が却つて不忠とをり天下の乱を招くの道理夫故軍議は御無用と各

々方を御止申た(道)ヤア事に仮托つけ徳川をおぢ恐れるる手前誰と忠義を磨く面々とは雲泥万里の相違で(○)主君の爲に軍議をこらし(△)天下の愛ひを除く我々(□)無用と止むる長康殿こそ(×)君へ對して不忠でムらふ長イヤ不忠には候はず則忠節亡君殿下御他界の後是最早天下は我者と仁義を以て人を懐け何が事の發しかば其虚に乗して大坂を呑んとせらるゝ徳川殿が心は誰しも疑う所然るに各々共管に忠義一圖の心よりして家康公を討ん杯と迂濶に干才を動かしなば夫ぞ毛を吹疵を求め後悔あらんと存する故扱こそ主君の御爲に軍議を無用と止め申した(道)イヤ夫が所謂臆病未練毒味あしたる澁川か時日違へず死したるを聞出したるが何より證據反問苦肉の謀略にて主君を供奉なす勇士等を毒殺なせし家康が罪を責るは今此時尻込致すの不忠でムらふ(長)イヤ澁川が死亡せしも手前に於ては分明ならず(道)然らば病死か毒死取るか貴殿は暇と御存あるや(長)サ存じて居らふ等あかれど同席ありし片桐氏老母へ頂戴致させんと供物の菓子持歸られ母諸共に賞翫あれど別段異状はかいとの事毒に非らざる儘を證據然るに貴殿老職の重き身分に有なうら血氣の若者同様に無謀の軍議を起さるゝは君へ對して不忠の至り但し毒死を致せしと儘かな證據を見出しありしか(道)サ夫は(長)且元殿が賞翫なし異状のなきを御承知あらば無謀の軍議と御扣へなされへト茲へ茶道一人出て來り(茶道)如藤肥後守様御登城遊され主君へ御暇乃義御願み申たしと御次へ御扣へでムり升ト言捨ては入る(道)毒死と思ひし加藤清正登城せし

とい心得ず奥へ參つて虚實を糺さん何れもムれト道夫近習付て奥へは入(長)對冠の折よりあの清正夥多の戰場往來なし一度も不覺を取りし事あく鬼も欺く勇士なればかゝる當今の形勢を見捨て國へ退身なし閑を樂しみ居る様な迂濶なものには非るに暇の願ひもしや毒氣にト思入有て(長)コリヤ清正が心腹の極意をさぐるが肝要なわへト長康思入有て懐の中へは入る跡床の淨梳理にある「治れる四海の波も豊かにて秀頼公の奥御殿數多かしづく局達付添ひ守護し奉る」ト正面の御簾を卷上る真中に秀頼左右に二位局正桂の局下髪緋の袴にて住ふ「折から立出る市の正君の御前へ謹んでト是と一所お片桐出て來り(片桐)ハッ我君へ申上奉る先刻言上仕りし清正が暇の願ひ淀殿へもお願申せし處我君の御賢慮に隨ふべしとの御説なれば何卒彼が暇の願ひ御聞濟下さる様偏に願奉る(秀頼)淀殿よきにと仰せあらば如何にも聞濟得さすぞ(片)コハ有難き其御説大慶至極に存じ奉り升(二局)清正殿は十三才の初陣より數ヶ度軍さに御手柄遊し亡君の仰せにも天下の英雄とは清正の事ありと御心に叶ひ遊されしより關ヶ原の合戦此方五十四万石を領せらるゝ御當家隨一の大忠臣御退身を仕給ふは何とも合点が參り升せぬ(正桂)殊に此程のお噂さにも御後見たる内府様我君様を失ひて天下を奪ふと世の取沙汰左様な事もムり升まいら其風聞のある中で御本國へお歸りあるは何か深き思召のある事と御母堂様にも殊なふふ案じでムり升る(且)御母堂の御心中某推察仕れど何を申も退身と決心なせし加藤清正只今君よりお許しの御暇を給わる上か

らはこの由加藤へ申聞ん(秀)コリヤ清正爺に余は逢たい國へ歸らぬ内是へよべ(片)ハッ
 疾よりお次へ扣へ居ればソレ呼出し召され(正)ハッお次へ扣へし清正どの君のお召いそい
 ではへト向ふ揚幕にて(清)ハア、「聲諸共に次の間の襖押明け加藤清正万夫無當の英雄も
 常にかわりて萎々と御前遙かに平伏なしト清正出て來り(清正)我君の麗わしき御尊顔を拜
 し奉り祝着至極に存じ奉り升「頭べを摺付け敬へば(二位)何か様子は存じ升せぬと御本國
 へ御退身のお願ひ故に先刻より(正)我君のお待兼早ふお進み遊し升せ(秀)爺近ふ參れ(清)
 ハア「上意お清正徐々と御前間近く扣ゆればト清正舞臺へ來るこの時上手にて(淀)ナニ肥
 後守が參りしとや(片)アノお聲は御母堂様「言ふ間あらせず奥殿が立出ぬふ淀君も君の嵐
 ぶ散殘花も尊き御粧ひ腰元あまたかしづき守護し參らするトこの文句の内淀殿後室の持へ
 にて出る跡よりこし元出て居並ぶ御前の皆々平伏する(淀)コレ清正先刻執權且元が委細は
 姜わへ申せしがいよく御身國許へ歸りといと申さるゝか(清)ハッ仰せの如く此清正最早
 年齢定命の五十路の坂を越れば何卒一度歸國の義御許下さる様偏に願ひ奉る(淀)清正近
 ふ(清)ハ、アトマツと前へ出る(淀)今更申すに及ばぬとも御身事の故太閤より豊臣の性を
 も給わり主従とはすながら大政所に内縁あれば御家門の列へもさし加先君の御他界後頼
 みに思ひ居つたるに急に國へ歸りたしと暇を願ふは心得ずせめて是なる秀頼が三五の春を
 迎ふるまで此大坂に止りて豊臣二代の君なりと仰がれぬ夫迄は御先途見届けられるか

と思ひし事も仇となり遙かに遠き九州へ退身をすとは情けなや治世といへど後見たる徳川
 殿も右大臣家を失わんとこの企ありと此程よりの取沙汰を御身も心得居りながら世の形勢
 を余所に見て國へ退身いたしたいとハア、聞へた家康殿の威勢に怖れ免るゝ氣か如何に老
 衰せしとても情ない所存じやナア「恨み給へど清正は猶も心を押かくし(清)仰よは候得と
 も抑虎之助の昔より戰場を履みたる數知れず賤々嶽にては山路將監を討取り又山崎めては
 四王天を討ち其外根柢四國征伐後に九州岩山を責め落し木山彈正の首べを揚げ新納武藏守
 と對陣なし向ふ所一として勝利を得ずといふ事なし朝鮮國まで攻入て名を知さる此清正
 關東武勇の單として聊恐るゝ所はなければ如何おせん徳川は仁義智勇の名將にて恐れ多くも
 右大臣家を謀り奉るべき無道の事をせられんやよし又左様の事ありとも智勇勝れし市正が
 御傍に御附添奉り殊に先君築かせむひし日本一の名城たるこの大坂にましますば幾百万
 の大軍を引受るとも何をか怖れん万一うゝる事あれば老衰なすとも加藤清正帝釋栗毛に鞭
 打て直ちにうけ付け敵勢を踏乱らん事手裏にあり必ず御配慮遊さるゝな「左もいさぎよき
 清正が詞を察して片桐は(片)淀殿へ申上り肥後守が今の言上もや自然の成行を見捨て國
 へおめくゝと退く様な怯弱を武士に非る事は我人共に知る所何卒彼が願ひの如く御暇下し
 置るゝ様偏に願奉る(淀)なる程執權の申す如く忠心厚き肥後守定めて身体も疲れつらん望
 みの通り只今より歸國のいとまを遺わし升ふ(片)スリヤ御疑念を御晴らし遊ばし(清)御暇

下し置くゝとナ(淀)國へ參つて保養いたし隨分共壽を保されよ(清)有難ら其仰せ此思命を蒙も且元和殿の執成故(片)御身の望み叶ひしも拙者に於ても大慶至極(清)有難い義にムり升(二位)改め申に及び升せぬら先年大地震の砌りお驅付なされし時は皆一同に蘇生の思ひ只今以てアノ時の嬉しい事は忘れ升せぬ(正)其御勇しさに引換て常に似氣なき御顔の色つやさふやら御心浮かぬ御様子御國へ御出遊しても必ずお身を御大切にこし元(三)昔しにかわらぬ御勇さまじい御顔を再び拜見致たふムり升れバ(三)御幼君の御生長を御待なされて下さり升せ(三)我君様には加藤様をぢいよくと御意遊し(四)お慕ひ遊せし事なればお名残をお惜み遊し升せ(清)各々方まで其お詞清正身にとり祝着至極(片)改めてお暇のお詞頂戴ある上は遠慮召されずこの世の名残を〇イヤサ此場に於て心置なくお暇乞をいたされよ我君御詞下し置れ升ふ「始終を聞て恩愛に浮む泪の秀頼公御褥を放れおひ(秀)コリヤ清正願ひの通り聞濟得さす國へ參て保養いたせ(清)御懇の御意有難く存じ升る(片)加藤氏もそつと傍へお進みめされ(清)ハット秀頼のそバへマツと進む(片)我君へ申上奉る只今彼が申す事お聞取遊され升ふ(秀)コリヤぢい何なりと願があらば秀頼にいふて行きやれ(清)恐れ多き其御上意亡君御存生の折よりして分に過る大縁を給わり今日までも私なく御奉公は致せしが早清正も老年故今度肥後へ引取升れを是今生の御暇と思ひ極めし此門出今このぢいが申上る事恐れながらお聞取被下り升ふ〇君御誕生有らせられ御物心の付せおふに隨

ひ斯武骨なる清正を爺よくとお慕ひ遊ばし又恐れながら某しも我子の様に思ひ參らせ今日までも罷ありまら此度お暇賜わつて歸國なさば又重ねて拜謁の義は覺束なし此清正なき後に天下を掌握し給ふ共智仁勇を兼備せし徳川殿を父君とも思召れて何事も且元が詞につき返初にも關東へ弓引杯と無謀の事ゆめくと仕給ふ事なかれ左すれば君の御仁徳自然と顯れ日の本の万民草の靡くが如く再び開く豊臣の御代万歳と疑ひなし此義斗りは故太閤の御遺言共思召され必ず忘れ給わぬ様くれくと願ひ置升る「心を決せし清正が涙に誠わらぬせり功君お聲曇らせ給ひ(秀)ヨ、そりや承知して居れど今國へ歸やるともふ大坂へは登城せぬかや(清)暫く保養いたしなば再びお目見得仕らんと心は矢竹よ早れ共曲れる腰の様弓額の波の早手にて冥土の沖へ出帆なさバ最早是が今生の「名残の灘も汐満て泪に袖を濡しけり秀頼公も目バたきの數彌増る御有さま(秀)是が別になる事なら爺の顔をよく見て置たい(清)ハ、この爺も我君の「是が御顔の見納めと髭に縫りし幼君を打ち守くと百億方の強敵も白眼挫ぎし名鏡を照すが如き兩眼も保ち兼たる勇士の泪ワット一聲時鳥泣音血を吐斗りなり且元さこそと推察なし(片)我君様には御負最の清正國へ退身なす故斯まで別れを惜ませ給ひお歎あるは御尤も加藤氏にもケ程まで慕わせ給ふを跡に見る心の衰しさ如何斗りと推察いたしてゐる(淀)實に争われぬは世の人情加藤程の勇士でも斯くまで慕わせぬふてはほんに身も世もあられまいと(二位)傍へ聞せし我々迄心の内か思ひやられて(正)お

し(秀)ヲ、面白ひく(清)是にて御免下さり升せ「汗押拭扣へれば(片)清正手振を御覽に入られば最早おいとまわ給るべし(秀)ヲ、ぢいよ堅固で居れよ(清)ハ、ますく君も御健勝で「いふ一言がこの世の別れすく立て廊下口御座をバ跡に行水の流れにたとふ命ぞと見返る泪且元が若君抱き見送こなと(秀)爺もふ行やるか(清)ハアアイヤ片桐如才はムるまいが幼君補佐の重任は偏に御身に御頼み申す(片)其義は且元身命にかへきつと守護し奉れを心置なく歸國あれ(清)夫にて身共も一ツの安堵(片)とはいふもの、是がこの世の(清)おいとま賜り升る(秀)ヲ、大事にいとせ(清)ハア「心残して出て行くト清正向へは入る「跡見送りて幼君が残り惜氣の御有様見る且元もいたわしく浮む泪を余所み見る道犬はもどかしく(道)イヤ我君にハ奥殿へ御座を御移し遊し候ふ(秀)清正ぢいを支關まで見送りてやつてもいゝかや(道)イヤ夫にては我君の御威光落れば御無用お遊し升ふ(淀)見送りやりたふ思ふなら物見へ參つて余所ながら見送りやるもよろしからん片桐よきに斗らひめさき(片)いかにも左様仕らんいざ我君には御物見へまづ御越有られ升ふトこの人數奥へは入るトこの道具廻る

本舞臺正面白地へ桔梗の紋散しの襖白地の欄間上下杉戸都て加藤屋敷居間体ドロくにて道具止ると茲に以前の清正眠り居て目を開き

(清)扱は今の夢で有たか清正今日城内へ出仕して主君よりお暇給わり歸宅せしが申殘せし事ある故夫のみ心お掛りしご心氣の勞れか一睡の夢お見へし人々も心々の大坂城秀頼公が御幼年にまします砌り清正の髯へ縋りて退出の跡を慕ひし其お姿が目に残り朝暮心に忘れざるがありく見たる夢の内わが心にも耻入し武骨の手振の童唄へテ扱夢と申ものは取留のなきものではあるト茲へ下手か加藤の臣傳藏出て(傳藏)ハッ申上升(清)傳藏か何事じや(傳)兼て御内意承り御城内へ密々立越街の風説伺ひ升れば執權大野道犬どの手勢をもつて軍馬を催し徳川殿の御旅館へ責よせんといふ企ある由承つてムリ升故容易ならじと立歸りお知らせ申上升る(清)ナニマリア思慮淺き大野道犬益なき軍馬を催し居るとナ(傳)左ある時には乱國の大事を引出す御基ひ(清)是と申すも淀どのが大野を用ひ給ふ故じや(傳)兎角女儀の御淺はか(清)コリヤ容易お歸國と脇息を置かへるのダ木の頭(清)相ならぬわへト此もよふ時の太鼓よて拍子幕

四幕目 加藤屋敷の場

一加藤清正

一平野長康

一加藤の臣傳藏

一厩中間豆助

一同角助

一中間

四人

一近臣佐原文吾

一大野の軍兵

大勢

一榊原の供廻り

大勢

一榊原式部大輔康政

一老女藤井

竹本連中

本舞臺一平舞臺上手へ寄せて貳間の馬部家下の方練堀の裏を見せ都て大坂加藤屋敷の体交

に中間角助赤イ手拭を冠り是を中間四人取巻中間豆助扣へ上手に前幕の傳藏立掛りしらべにて幕明く

(角助)助けてくれ〜(中間四人)静りにしろ〜(傳)コリヤ中間共見れば當家お見馴れぬ奴立騒いで如何にたした(豆助)これはケ様でムリ升私共兩人は隣家敷に奉公致して居る中間でムリ升が是に居り升角助が疱瘡神に取付られ未だに山を上升せぬからとふした者と思ふ所へこちらのお屋敷の御乗馬にまたがせる時は疱瘡を軽くすると聞まして今方こちらの中間衆へ頼み込で當人を連れて參たのでムリ升(傳)コリヤ〜中間何を申す夫ヤ主君の御乗馬にまたがせる時は厄病神などは忽ち落る名馬なれど一昨日主君には御本國へ御立ちに相成り御乗馬もお曳故當屋敷には居らざるわ〜(中間)デモ此既に御乗馬が(傳)ヤアだまらふこやつ其方共にも兼てより○イヤ兼て乗馬の居ぬ事申付て罷ある心得違を申なぞとはアノ爰な疎忽ものメダ(中間○)へ、エなる程左様でムリ升たもふ御乗馬は居なかつた(○)ツイ一昨日御前様がお召連になり升たを(○)失念致して居り升たが考て見れば居ない御乗馬うつかり致して升たので思ひ違ひをいたし升た(豆)そうとも知らぬ酒を買ひ馬に豆をば喰はせる格で疱瘡やみを連れて來たが酒を一升棒おふつたか(角)馬に喰われて堪るものかト皆々をつきのけて向へ逃ては入る豆助始め中間は追かけては入る(傳)口さがなきは下郎の常ハテ困つたものじやわへ御主人には先達大野の擧動をお聞有て家來斗ちを仰こしく御本國へ

發足させ一ト間へ引籠りにてお残りありしは不審の一ツ是をる厩の御乗馬も同じ様に打しはれ餌バみとせぬも不審の至り仮令何れの御使者と申し入來あるとも御本國へ早御發足の跡なりと必らず一ト間へ通すなど仰せあるのも一ツの不審夫故家中一統へ堅く口留致し置しに下郎の口のさざなくも他へもらしたるものなるか昨日といひ今日も代る〜の病氣見舞斷りいふも蒼蠅ものじやト爰へ上手より老女藤井銀の瓶子を持出て來り(藤井)傳藏殿是にれ出ありしか(傳)思ひがけなき藤井どの何御用にて此處へ(藤)御主君の仰せには妙見尊へ備へしお水是なる乗馬へ與へよとお情籠る思召に持參致してムリ升(傳)夫は近頃御苦勞千萬如何致せし事なるか是迄一度も病ひなどには罹りし事なき駿足が飼料も碌々食し升せす萎れて居るが不思議でムる(藤)夫を殿にいか聞遊し殊の外お案じおて尊きた水をこの様に半はを分て下さり升た(傳)然ば早速與へ申さん(藤)御苦勞ながらとふぞ是をト傳藏は厩の中お乗馬を曳出し瓶子の水をかいば桶へ入れる馬は是を呑む事(傳)イヤ何藤井どの畜類ながら主君の仁情存じ居るか悦ばし氣に首うただれてお水をいたく其ありさま(藤)物はいわねど兩眼に泪を浮かめ僅かなるお水といへど残りなく(傳)左も有がなぐ呑干せしは(藤)かいばの桶お水の恩(傳)深きを忘れぬ心の底(藤)夫も道理か御主君の(傳)惠む御慈悲はかくまでに(藤)下を憐むれ情けじやナアト爰へ近習一人出て來り(近習)申上り只今平野遠江守様御病氣見舞として御入來にムリ升(藤)スリヤ又もや平野様(傳)御苦勞ながら御

斷りを(藤)ドレ御挨拶を致し升ふかト上手へ入る傳藏は馬へ轡を食ませ(傳)コリヤ文吾御乗馬を厩へ早く(近)ハット馬を引て厩へは入り直に出て(近)別に御用はムリ升せぬか(傳)隣家敷の御門へ参り角助と申中間疱瘡やみにて出門せしかと内々にて聞て参れ(近)心得升てムリ升ト下手へは入(傳)王君の残り御座あるを隣屋敷へ知られなば此傳藏が役目の落度少しも油断は相あらぬトリヤ部屋へ参つて返事を待ふかト上手へは入るあどばた(近)になり以前の角助逃て出るを豆助追かけて出て來り角助は厩の中をのぞく事よろしく豆助わざと大きな聲にて(豆)うぬ爰に居やグつたナト兩人四方を窺ひ(角)時に貴様も此已れも關東方の侍ひに肩を入れるいわれもチーガ褒美がほまさに金のつると見出すてだての隠密方だ(豆)國へ歸つたつもりにして自分の屋敷に清正が引籠つて居る事を關東方へ注進すれば褒美の金は望み次第(角)それじゃア已れは奥へ忍び猶も様子を探らふから(豆)已は是から關東方へ馬が厩に居る事を注進するから跡を頼むぜ(角)跡の所は引請るからちつとも早く知らせてくれ(豆)ぶまき働きを仕るナヨ(角)已れより手前が氣を付ける(豆)うんなら角助(角)褒美は山だぜ(豆)アコレト押へる時の鐘めて道具廻る

本舞臺一面の平舞臺正面紋散しの襖都て加藤邸書院の体上手あ平野長康上手に老毎藤井住居この模様相方にて道具止る

(藤)折角の御入來もお立の跡ゆへ失禮勝御用捨ちされて下さり升せ(長康)清正殿には御病

氣と承り御見舞に参りまが最早御本國へ一昨朝御發足になりしとナ(藤)右大臣家先達てお暇を爲わり升と直に翌朝國許へ發足致てムリ升(長)扱々夫は残念千萬清正殿の御心慮大がい夫と提案おせと佞人多き城内故わざと先日御出仕の節御尋ね申さず別れしがいよく病氣と承り御屋敷へ罷り越清正殿の御賢慮を承らんと参りしに最早御歸國の跡ありとは猶豫致せし拙者が不覺ハテ残念を義でムる(藤)先刻も薄田様が折角御入來有しかど御同様な義を申上御歸し申してムリ升るが發足の前方お御邸宅へ参上いたすか御招待を致すかして御暇乞を致す等を過急に發足致さねばならぬ義出來致せし故各々様へは跡々にてよろしく御詫を致しくれと申置れて一昨朝御歸國おされてムリ升る(長)スリヤ御急ぎの御用にてム、○イヤ何藤井殿もそや御發足とあれば是非もないがシテ御主人清正殿には御換りの様子もなくおすこやかよて御歸國ありしか(藤)イエもふんどんと健かにて未明と申せ共大坂内ハ憚りあれば歩行致して發足致すと仰せられ升てムリ升(長)先は夫にて安堵致した(藤)ナニ安堵めされしとは(長)實は先日城内にて御目に掛りし其節も常に變らぬ御血色故其安堵ト致せしかと輝政幸長兩人が國元おて病死と申し清正殿にも右大臣家へ御暇を願われしは心得難く存る故御胸中のほど承わらんと密かに推參致せしが御別條なく御歸國と承つてまづは安堵いづれそちらも御跡より御本國へお歸りあらんが其節拙者が心底をよしかにお傳へ下されい(藤)誠に平常御入魄をお結びありしお中とて左程にまで思召されわざ／＼御入

來下さり升とて有難ひ御心入れ夫と申に申されず○イエ夫と申傳へ升れば藤主人にも御悦びにムり升ふ(長)何卒御傳へ被下れへ然らば最早御暇いたす(藤)左様なれば平野様(長)うへすくも残念な事じやト此時上手の襖を明け以前の傳藏出て來り(傳)アイヤ平野様暫く御待下さり升せト平伏する(長)ヲ、傳藏か何用だ(傳)失禮の義は御免な被下れ主人の居間へ御通りある様申付にムり升(長)扱は矢張清正殿には(藤)イヤ其等ではムり升せぬ(傳)イヤ御案内致し升ふト兩人襖の内へは入る茲へ向ふか以前の近習出て(近)徳川家かの御使者として榊原式部少さま御入來にムり升ト言捨ては人(藤)コリヤ今の間に御窺ひ申さうか徳川家の御使者では伺わいでも御歸國と申の外はあるまいナアト床の淨琉璃になり「待間程なく主命を受に入來る徳川の臣下に名どくる榊原式禮たゞして打迎ればこゝろもそれと出迎ひトこの文句にて向ふか榊原康政出て來り是を藤井は出迎ぬて(藤)是はく徳川家よりの御使者として榊原式部少様御役目御苦勞に存じ升(榊原)何か只今承れば肥後守のには早御本國へ御發足になりし由御留守居近頃御苦勞に存る(藤)御詞恐れ入升る何ハ格別まづく是へ(榊)然らば御免「會釋をなして座に直る(藤)伏見よりの御使者道の長途も賑かし御勞れ只今鹿茶を献じ升れば湯煙草など召上り湯休息遊し升せ(榊)イヤくは歸國の湯跡とあれば配慮は無用に致されい(藤)シテ今日の湯入來はいかなる御使者よムり升か承けて清正へ申傳へてよろしく仰せ聞られ下さり升ふ(榊)余人あはらぬ藤井殿御本國へお越

しあらば使者の趣き肥後守殿へ申傳へて下されたし(藤)シテ其れ使者の趣きは(榊)藤井殿にも御承知ならんが先達て京師に於て豊國神靈祭典の砌右大臣家の供奉として片桐池田淺野の三士と肥後殿にも上京召れ其節二條の館においてお執持を致したる澁川入右門なるものお毒味して配領せし豊國神靈の御供物を頂戴ありし供奉のめんく池田淺野の御兩士には本國へ立歸られ俄に御病死ありしとは何か世上の取沙汰には主人家康謀略有て豊臣恩顧の荒諸侯除く奇計であらふなぞとよからぬ風聞聞及び一統迷惑致居りしお又候俄に肥後守殿右大臣家へお暇願ひ本國へ歸らるゝは毒死ならんとよからぬ風説聞しめされて我主君殊の外なる御心痛無事に歸國致されしか又は御病氣さし起り夫故御歸國めされし事か實否を糺し立歸れとの命を蒙り康政使者に參つて御座る「問ふも一物答ふると胸に一物につこりと笑を含ませ面てを上げ(藤)これはく内府公より何事の御使者と存じの外の其御掟主人清正承わらば有がたがるでムり升ふか何を申すも一昨朝國元へ發足いたし跡に残りし老女のお受け御懇切なる數々もお禮は詞に盡され升せぬ何れ近日國元へ立越升て此由を傳へ升るでムり升ふ(榊)シテ肥後殿には御別條なく御勇健よて立れしか(藤)とんと壯健にて久々にての歸國ゆへ嘸子供等も待兼居らふと殊に機嫌もいとよふ未明より取いそぎ發足いたしてムり升(榊)ム、シテ道中は乗物なるか馬上で立れしや(藤)當御府内は憚りあれば徒歩にてお立に成り住吉邊より馬上に致すと日頃秘藏の帝釋粟毛を成せてお立になり升

た(輔)ム、スリヤ御秘藏の帝釋粟毛を引せて發足いたされしとナ(藤)御意に御座り升(輔)イヤナニ藤井殿帝釋粟毛と申名馬は朝鮮迄聞へし逸物凡日本六十余州に類ひあらじと存せしガお乗換でもムるカナ(藤)是は又變つた御尋ね主人清正先君より拜領ありし秘藏の名馬何乗かへがムり升ふ(輔)ム、然らば何故一昨朝肥後守殿が曳せられし帝釋粟毛が常邸の厩に未だ残り居るや(藤)エ、(輔)余人は知らぬ此康政數度戰場にて清政殿と入魂を結びし中なる故よからぬ風説承り心痛なして罷り居りしに此度の御發足心元なく存ずる折から主人の命を幸ひと望んで使者に參侍てムる夫に虚言を述べられるはチトお恨にムり升「扱は嘶く駒の聲淺れしものかと言繕ひ(藤)思も奇らぬ其恨み只今あなたへの仰せの通り徳川様の御家臣でも取分升て御別魂を結び升たる御使者の御入來病氣で屋敷お居升も乃を何故御隠し申升うや左程御疑念遊すなら厩へ御連れ申升れば主人の乗馬が居り升か但し厩に居り升せぬか得と御詮議ありし上御立歸り下さり升セイサ御案内致し升ふ「飽まで包む老女の大胆悟れどわさと逆らわす(輔)左程までいわるゝを詮議立する所存はあいな然らば御無事で肥後守さの本国へ發足ありしと主人一言上致すでムらふ(藤)スリヤ御疑念はムり升せぬか(輔)なんの御疑念申ろうと(藤)いづれ御使者の趣きハ國へ立懸へ傳へ升る(輔)然らば是にて御暇申す(藤)コリヤ鹿茶さへも差上ず(輔)ハテ御配慮には及び申さぬ「様子悟れど何事もいぬ色なる山吹の茶を斷りて康政が笑を含みて立歸るト此文句にて榊原は向ふへは入る(藤)

智勇鋭き康政殿主人の乗馬がこの屋敷の厩につなぎ有る事迄どうして謀り知られしや心ならざる事じやナア「思案に吐息次の間より襖押明立出る傳藏ト以前の傳藏出て(傳)藤井殿めつたに油断はなり升せぬ(藤)包む事程もれ易しと主君御奥に御座あるをどふふやら謀り知つたる様子(傳)夫が先刻見馴れぬ下郎當家へ入込居たる故中間共に尋し所隣り家敷の小者なりとて答へし詞も心得難く早速門にて問合せしに左様な下郎の返答左すれば彼等が榊原の廻し者やも相知れず(藤)スリヤ夫故に今の疑念を(傳)生ずる大事とならぬ内(藤)此由主君へヤ上ん(傳)拙者は使者の跡追かけ(藤)陸道を戻るか船路なるか(傳)其道筋を糺せし上(藤)事の實否を(傳)承知いたしたト傳藏は向ふへ逸さんには入る「折うら平野長康は何ふ間者を引捕へ奥の一ト間を立出ればト以前の長康角介を捕へ出て來る(藤)平野様には如何して怪しき下郎をお捕へなされ是へお出に相我升た(長)使者に參りし康政のこやつは正しく廻しものまつた大野が淺智にて今宵使者の歸りを追かけ討取る手筈と知れし故清正殿には馬上にて夫を止めに出馬の支度(藤)スリヤ主君にも御出馬とナ(長)こやつは幸ひ出馬の血祭り(角)コリヤモウたまらぬト逃にかゝるを立まわつて引据る「勇ましか諸りけるトこの引張にてよろしく幕

大詰 竹田街道の場

一加藤主計頭清正

一同家臣傳藏

一中間豆助

一平野遠江守長康

一大野方の軍兵大勢

一榊原の臣 大勢

一榊原式部少輔康政

竹 本 運 中

本舞台後一面在体の道具幕上下植込張物都て竹田街道在体の模様爰に前幕の傳藏を大野方の軍兵六人よて立つて居るドン／＼よて幕明く

(軍兵一) ヤア汝は加藤肥後守の留居を預る譜代の傳藏(同二) 大坂方に有ながら忠義の爲埋伏なす我々共の妨げなすは(同三) 關東方へ心を寄せ私慾に耽るニタ股武士(同四) 但此節主人に別れ女狂ひで血迷ひしか(同五) 手向ひなさバ味方でも(同六) 用捨はならぬ山樂ざし(同七) 道押開ひて(六人) 通し居らう(傳藏) ヤアニタ股武士とはわいらが事味方の軍令守らずして君の爲には大切ある御後見たる徳川殿へ又向ひ立する犬侍大事を引出す基ひ故味方たりとも捨おかれず此まゝ命は助ける使者に手向ひ致すとあらバ片つばしから用捨わかいぞ(軍兵) ヤアいよく／＼以てにつくき雜言イテ血祭りにいたしてくれん(傳) 何をこしやくなト六人を相手に立まわりよき程に向ふ々前幕の平野長康出て來り(長) 夫に居るは傳藏ならザや(傳) ヲ、あなたは平野遠洲様(長) そこは手前が引請る先手の奴ばら追散らせ(傳) 心得升たト兩人は立廻りながら上下へは入るト道具幕を切て落す

本舞臺後ろ黒幕上下繪心に本物の杉林此前に石の鳥居松の立木都て竹田街道稻荷の森の体波の音床の送りにて道具納る

「夏の日も暮て間はあく淀川の堤傳ひに立歸る使者の役目も仕をふせて今は心も康政の家來引連竹出道ト波の音にて向より榊原の紋付たる箱提灯を持し中間先に榊原康政此外供廻り付て出て來り(榊) 馬上とは存せしが僅か十里に足らざる道故乗馬も及ぶまじと思の外なるあの道のりしばしあれある森かげにて足の勞れを休めて參らふ」森を見當に歩み來る後ろの方より逸さんにくけ來る小者夫と見てト榊原は舞臺へ來るバタ／＼に成り向ふより下部豆助出來り直に舞臺へ來て(豆) もし／＼殿様しばらくお待下さり升せ(榊) そちや先刻の下郎なるか手前も是にて其方を待合す心ありしが能くぞ追かけ參りしぞ(豆) お提灯の御紋を目當にね跡を慕て參升た(榊) コリヤ家來共密談あればそち達は先へ參つて相待居らふぞ」家來を先へ追立やり(豆) 流石はぬからぬ御殿様先刻といひこの場でも下郎は口さがないきもの故お遠ざけなされ升て此豆助へ御褒美でムリ升か(榊) そちが注進いたせし故肥後守が歸國と偽り病氣で邸に居る事まで委しく相知れ満足あるぞ(豆) 此間から世間の風聞聞て嗅出す儲け口も池田の部屋にころ付て居る厩馬丁と見せかけて酒を一升元手に下ろし加藤の屋敷へ入込んで帝釋栗毛の居る事まで聞糺して徳川様のお使者と見た故内々でお知らせ申した忠義ものコリヤしつかりと纏つた御褒美を下さり升ふナ(榊) ヲ、サ併も褒美はまどまどりしのベ金を遣すぞよ(豆) エ、夫じやア命をト途にかゝるを抜打に切下る(榊) よしなき下郎が出た斗り天下を思ふ清正の忠義も空しく相成所かうして仕舞ば憂もあくやばり無事に

て肥後守歸國をせしと我君へ言上なさば天下は泰平誠に蛙は口故じやナア」のりを拭ひて
 一刀をめる胸の大智略立行く向ふの木の間にてト此時後ろよて(清正)康政どのお待なされ
 い(榊)何と「不意に詞をかけまくも賢き勇士清正が馬上ながらも忽然と顯われ出る森影も
 鳴動なすぞ恐ろしきトこの時後ろの黒幕を切て落すト後ろ淀川の流れ夜の遠見爰に前幕の
 清正馬上にて立身(榊)ヤ、御身は加藤肥後殿ならずや思ひ掛あくとふして爰へ(清)御身に
 一言云度事あり病中ながら肥後守是まで驅拔先刻より御出を罷り待居つた「流石強氣の康
 政も荒肝取られためらひしが早是までと覺悟なし(康)いかにも御詞承わらん歸國といひな
 し病苦を包み屋敷に潜み居られしを斗り知つたる康政故よも此まゝにてハ歸されまい御身
 を討つか討たれるか武門の習ひ何厭わん是もて勝負仕らふイデ、清正御支度あれ「身搦
 へなして詰ろくれは清正莞爾と打笑ひ(清)ム、ハ、ハ、ハ、流石は康政よく申と御身と我
 は朝鮮以來入魂を結びし中なれど仕義によつては敵となり劍を削るも武門の習ひ勝負せん
 とはしほらし、然し御身の義心に愛で最早恨みは散じたり(康)何と言わる、(清)何を包
 まん肥後守此程主君秀頼公より御暇賜わつて本國へ疾く引取る筈なれ共今大坂の城内に思
 慮なき佞人はびこる時節淺野池田が病死、内府公へ恨みを含み片桐平野兩人が制する詞用
 ひざれば主君の大事を引出す基ひと存じ今日迄歸國と見せて屋敷へ潜み味方の疎忽ある時
 は清正不意ふ討て出て是を制する所存なれば先刻御身が使者に参られ密意を悟りし様子と

聞き心あらざる其折うら大野に諂ふ雜兵共御身の歸路を追討せんと諸所に屯集せんと聞き
 清正直ちに出馬をなし無謀輩らを追退け此森影に伺ひしが間者を密かに切害なし無事を謀ら
 う御身の義心清正殆ど感心いとした(榊)ム、スリヤ發足と見せかけて屋敷に潜み居らる、
 は主人家康謀略有てもし大坂を襲わんかと疑惑有ての事なりと思の外に左はなくして味方
 を制するのみならず無益の下郎を康政が切て捨たる赤心を御悟りあり去上からは最早主人
 家康に御恨みいふらぬナ(清)何の御恨み申さうぞ實に名君の老公故自然と歸する天か下清
 正とくより見候てムる「天下を見抜清正が詞も康政打驚き(榊)驚き入たる御明察仰せの如
 く我主人豊臣の天下を奪う所存にあらず只世の中の太平を慮りし謀略も上一人より下方民
 安堵の思ひにさせん爲「夫といわぬぞ康政が心で詫々反問の罪も消行く清正が打顔いて歎
 息なし(清)申も愚事ながら御身如きの忠臣が今大坂の城内にて多く主君を補佐なさは我も
 心に残りぬぞ(榊)片桐平野の兩公を頼みにさる、斗りにて(清)佞人大野道次父子が詞を用
 專御母堂の(榊)其淀川の淺はかを(清)はかりて見れば君は船(榊)臣も水なる行ひも(清)誠
 に厄ふき淵でムるト此時時の鐘バた、にあり東の揚幕より以前の供出て來り(侍)ハッ御
 迎ひ(榊)左様ムらば清正殿(清)康政どの(榊)御別れ申す「ト西東立別れ行勇者と義者互ひ
 に赤心濁りなき淀川堤の宵月夜ト康政は東の揚幕へ行を(清)アイヤ康政殿暫く御身歸つて
 申さうには日頃の大望成就めされ無御満足に候わん佞令清正病死なすとも露抑かゝ御恨み

とは思ひ申さず只此上は我主君秀頼公の恙き様御頼み申すと傳へられよ(紳)胆にこたゆる
 其一言頓て成就の期に至らば神ともあがめん清正殿夫にて無念晴されよ(清)禮は泉下で
 (紳)さらそでムる「伏見をさしてト康政先に侍附ては入るト下手か以前の傳藏長康出て來
 り(長)様子はあれにて承りしがいづれ劣らぬ勇者の誓ひ(傳)未前を察せし御主人が残る方
 なき御頼も(長)思わす落涙(傳)致してムるトこの時日覆にて時鳥啼く(清)我一命も月代と
 共に傾く夏の夜に(長)淀川堤よてりそうて(傳)雲間を洩れし一ト聲は(清)頓て不如歸のト
 三人顔見合るを木の頭(清)門出ドヤナアトこの模様よろしく幕

大切淨瑠璃

鈴音眞似操

明治廿七年七月

東京市村座ニテ興行

- | | | | |
|-----------|-------|-----------|--------|
| 一 足長の人形 | 尾上菊五郎 | 一 一寸法師の人形 | 市川 團子 |
| 一 骸骨の人形 | 尾上菊五郎 | 一 同 | 尾上 菊松 |
| 一 寢臺の人形 | 尾上菊五郎 | 一 警官の人形 | 中村 芝翫 |
| 一 同老人の人形 | 尾上 松助 | 一 口上言 | 片岡 市藏 |
| 一 椅子藝の人形 | 市村 家橘 | 一 西洋娘の人形 | 岩井松之助 |
| 一 一寸法師の人形 | 市川猿之助 | 一 同 | 尾上 榮三郎 |

- | | | | |
|------------|-------|----------|-------|
| 一 小骸骨の人形 | 尾上丑之助 | 一 鈴踊りの人形 | 中村 兒福 |
| 一 ホテル小女の人形 | 同 | 一 同 | 片岡 龜藏 |
| 一 鈴踊りの人形 | 中村 芝翫 | | |
| 一 同 | 市村 家橘 | | |
| 一 同 | 尾上菊三郎 | | |

本舞臺真中五間の貳重海老茶地金かな物の額ぶち前づら一面に萌黄地の純帳を却し上下も
 淨瑠瑠都而西洋操人形興行の体鈴の音してピアノの鳴物に成り幕明くとト下手より洋服形の
 口上言出て○各位益々御機嫌克御座遊ばされ恐悦至極に存じ奉り升隨ひ升て爰元御賢に供
 し升淨瑠瑠の義は先きく御高評を博し升たる英國の伎藝師ダーク氏一座操人形の學びに
 御座り升が人形と違ひ未熟不鍛練なる演劇の義にムり升ればお目まだるき段は御最負の余
 慶を持升て御用捨御見許しの程偏に希上奉升先は此所淨るり始り左根お御覽下さり升せう
 ト下手へ這入る下手淨るり臺常磐津出語り成る「奇を好み新たを愛る君が代や高評博す
 西洋の伎藝を爰にわざをぎの道に寫して初舞臺ト正面の純帳を卷上る一そも演劇の吉例に
 式の三番のそれならで頭に尖る立帽子洋酒の壘を鈴にかへ手振も軽く足長の拍子を花の露
 拂ひト上手より道化師の操人形西洋酒の壘を持つぎ足宙乗りにて出る「どつば偏に御愛顧
 の余慶を願ふ種蒔や千筋糸のか引立霞む雲井に鞠の曲投てこなして沸瀧をぐつと息つき

い旨ひ舌の鼓に立足も誰ぞこよかし花の影に此留り後ろの道具英國の公園の書割に替り上手の淨るり臺清元出語りに成り「長閑なる春の日脚に公園を遊歩も派手な二人り連れト下手より西洋の少女二人出る」誰も美形と人の目に月に幾度のソングデイをかぞへ樂しき道もせや今を盛りと咲く花に見取れながらに過ぎ行くを「梢でキヤッキヤ足長の猿にはあらで呼子鳥」こなたはむれたつ百千鳥稻負せ鳥これなりにいなとも言へず「常磐木の幹にまどひし蔭かつら」そもや互ひに握る手々國の禮義の嬉さに竹の千代もと睦みあふ誓ひを結ぶさし事もコップなけれを直グやりみ「下地は好の御意任せ酔ふて根笹や姫小松引てみどりと寄添ば」妹脊の松の門違ひ尾上へぶてし唐松に五葉はなしと振拂ひ打連てこそ退れ行くト少女二人下手へ這入る「美形は消てドロケン立んどすれど腰立ずおのが養龜蓬來の巢を喰ふ松へ脊を當てやつと立たる鶴の脛ギ長キを島の浮拍子淨れ興じてト振有て下手へ這入る」前藝も相のくさびを兩掛に荷ひ出たる椅子の藝ト下手よりあやつりの人形椅子をニツ天秤おて持出て「右へかけたり左へ掛けて一寸天窓で天秤の目方も輕き離れ業學校生徒の運動に浪に漂ふ大海の船は物かは帆柱の兩足揃へ逆サ立元へ戻して浪靜ト振り事の輕業在て「默禮してぞ入にけるト下手へ這入る」英國も人民保護の警官が沓音忍ぶ密行に怪しの影の花の許暗き夜中に角燈をわざと持ねば後ろよりほへつく洋犬が官服を喰へて引張りコリヤどうじや畜生放せと狼狽は可笑しかりける其跡へト上手より警官の人形と洋犬出て振あつ

て這入る「かわつて出る採はひよつくりひよこ」樂屋から打出の小唄大黒の眞似かと思れば高帽子天窓の長イ福祿壽ト上手より一寸法師の人形三人出る「我國の芝居で言はば市村座脇狂言の番立に昔を忍ぶ東京や湊賑ふ寶船福の神風ヨソソ」上等官の軍人お見沙門あれば商人の有徳は布袋腹ぶくれ連れ藝妓の辨天も金には靡く札の顔いづれ惠比壽か白髭の壽老人めく武の内伸る身代とこ迄伸るこんなあのびる隠す脊丈の底抜けに鍋と鍋との底競べト三人振有て上下へ別て這入る後ろ一面の黒幕に成り「秋風の吹くにつけても哀れ知る穴目の薄き朦朧と宙宇に迷ふ其魂魄ト上手より骸骨の人形出る「じたひ我等は異國の産れ色にそやされこんな洒落て仕舞ふた」洒落の遊びに出る時の石鹼洗ひ粉糖袋磨く手足の爪先キや顔の小皺の氣になりてアゝでもなひがうでもなひこすりく「て厚皮がむけてどうやらあくぬけがしたと思へば骨ばかり洒落すぎたを身うなしめバ「もうし」と虫の音に招く手さへも糸芒キ草踏分て小骸骨ト下手より子供の骸骨出る「かよわかばね見返りてろあたは誰れじやと尋ぬれバ「おらは娑婆にて子供の癖に洒落た眞似して欄干渉り橋から川へそんぶりことおつこつた落て水死の其果が賽の河原で小骸骨「ヤレ此洒落者頼母しやしやれた骸は報ひも罪も離ればなれの枯野原土に戻りて洒落た同士ト時の鐘鳴る「早明近き鐘の音お風も無常と吹送り形チは消てト兩人引ぬき後ろの道具替る英國のホテルの書割骸骨の人形道化師の旅人に變り小骸骨の人形ホテルの小女に變る下手より老人の旅客

の連一人出る「二人四トルを二トルに直限り安く泊つた化物ホテル決れる座敷は大きな地震下女も連衆もうろたへて上を下へど大騒ぎト三人振有て「地震ならねば小女は胸撫おろし次へ行跡に二人りは氣味悪くこはくながら寝につけば股へ這寄る大鼠ト此内小女は下手へ這入る跡に客兩人白の寝間着に成り上手より寝臺を一ッ出して此上へ道化師寝る老人は下手の下へ寝る鼠出て道化師の股へ這ひ上る道化師恟りして寝臺から落る老人此音に恟りして起る「つぶやさながら打伏せば又もや下より刎上られづんでんごろりと寝臺から落て恟りあきれ顔ト道化師寝臺から落る事あつて又老人一人寝臺へ寝る事「竊盜居ぬかと警官が入來るとたんに怪物がいで、又もや大騒ぎ不思議なりけるト上手より以前の警官出て老人恟りふるへる道化師も逃に掛る此時寝臺の下より化物出て警官も恟りして逃る是にて後ろの道具替り山水の書割遠見に成る「音もがらく賑はしく揃ひいでたる鈴踊り「歌舞の舞臺の打出しや「伎藝の榮へを「祈るらんと下手より唐人笠を冠りし筒袖形りの人形五人兩手に鈴を持出て常磐津清元打合せの合方にて鈴踊りの振事あつて此留り洋服形りの口上言出てまづ今日は是きりト目出度打出し

明治二十七年八月廿九日 印刷
同 年九月一日 發行
版權興行權所有

(定價八錢)

東京市淺草區馬道町貳丁目十貳番地

著作人 兼發行人 竹 柴 金 作

東京市京橋區新肴町八番地

印刷人 酒 依 昌 知

同

發行所 酒 依 活 版 所

